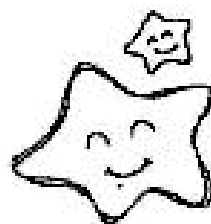


# QSK にぬふあぶし

No.279

ね  
子の方向の星



## みんなねっと九州ブロック家族会 沖縄大会に参加した感想

私宅監置のシンポジウムに行ってきました。

僕は精神障害者当事者で、私宅監置という精神障害者への仕打ちを知り、映像も見る事ができました。私宅監置とは、日本では1950年まで、米軍統治下の沖縄では1972年まであった制度で、精神障害者を庭の片隅の小屋に閉じ込めて生活させるようなことで、その生活が人の生命を脅かし、社会性を失わせて拷問のような、まるで罰を下しているような仕打ちで、その当時の価値観をととても残念に思いました。

精神障害者を「劣っている者」、「程度の低い者」、「悪そのもの」であるかのように軽視して、家族からそういう人が出れば、国や地域、家族、社会全体が、その人の気持ちを知ってあげることなく、懲らしめるように罰をくだす。そんなふうな野蛮な仕打ちを、人が人にしました。

シンポジウムでも映像を公開することを躊躇したそうですが、公開に踏み切ったのは私宅監置を受けた方々の生きていた証明と私たちへの戒めであって、人に対しての偏見や攻撃性、傲慢さ、冷淡な態度、残虐性への戒め、警鐘だと思いました。

これから私たちができることは心からそれを反省し、悔い改めて、障害があってもなくてもみんなが社会で共生していけるような社会づくり。希望を持って、その未来へのヴィジョンを持って進んでいくことだと思います。

病院生活も、ときには私宅監置を形を変えて行っているようなもの。治療であればいいのだけれど、帰る場所がなくて病院や施設にいなければならない、そういう失望してしまいそうな暗い現実を変えていくべきです。（次ページへ）



(前ページから) そもそも障害があっても人はみんな違うし、同じ顔なんてしていません。例えば、人間が手を加えていない、品種改良もしていない、そんな花こそが一番キレイでその花そのものなのです。だから、障害を持って生まれたとしてもその人はその人なのです。その人らしさが大切で、尊く、皆が思いやりの気持ちを持って共生していくのが本当だと思います。誰ひとり取り残さない。皆、一人一人、個性があって尊厳があり、大切にされるべきです。

僕はこのシンポジウムで思いました。もし困っているような人がいるならば、助けてと言われたいから見過ごすようなことではなく、手を差し伸べられるような、そういうごく当たり前の感情を人が自然に出せると良いと思います。

精神障害者には、優しいけれど要領が悪く、心が病んで迷惑行為に走ってしまう人もいます。

自分の中のそれに気がついて、どのようにしていったら生きやすくなるか、気づくまで見守ってくれるような社会であって欲しいです。そういう優しい社会を目指して進み、かつて私宅監置を受けた方々への哀悼の意を示して、私たちはこれから平和な素晴らしい社会が出来るようになるために進み続けるべきだと思います。

(村吉政勝)

## 沖縄大会報告集刊行のお知らせ

このたびの九州ブロック家族会・沖縄大会の様様をまとめた報告集『痛みの共有と連帯』が完成いたしました。

ご登壇いただいたみなさまの発表報告のほか、会場との質疑応答、アンケートに寄せられた声の紹介など、読み応えのある内容になっています。

お求めの方は沖福連までご連絡ください。(定価 500円+税)



大会報告集『痛みの共有と連帯』より

## ムーチーの由来話

宮城進さんの絵本『うちなーの鬼たいじ』を読みました。

沖縄が琉球と呼ばれていた頃のお話です。

毎年、冬になると村に恐ろしい鬼がやってきて、小屋を壊して家畜のヤギをさらっていったり、邪魔する人を殺してしまったりします。

村人たちが困り果てるなか、ある兄妹が、大切に可愛がっているヤギを守るために、一計を案じて鬼に立ち向かいます。

沖縄本島では『鬼餅』というよく知られた民話があって、その物語を由来に、旧暦の12月8日には餅を食べて健康を願う行事・ムーチーが受け継がれています。

民話の『鬼餅』も、やはり鬼と兄妹との物語です。ただしそちらでは、鬼と化した兄を、憂<sup>うれ</sup>えた実の妹が殺害するという、残酷で救いのない話となっています。

精神保健福祉に関する仕事も歴任してきた著者の宮城氏は、この民話について、「青年期になり、精神障害を発症した兄を、鬼だといって殺害した」物語なのではないかと考えるようになります。「ホントにそれでいいの？」と問いかけます。

桃太郎など、鬼の登場するいくつかの昔話を思い浮かべたとき、その多くは鬼を“外部の存在”として描いている印象があります。英雄譚のなかの敵役であり、そうした昔話と『鬼餅』とを同じ文脈に並べることはどうも違うように感じられます。

内面的なものとして鬼を扱っている物語では、人が怨霊化して鬼となる、能楽などが思い浮かびます。『鬼餅』の場合、兄が鬼と化するまでの経緯や理路が詳しくは描かれていないため、なおのこと理不尽で違和感を残すものとなっています。

さて、『うちなーの鬼たいじ』では物語がどう描かれているかというと、それは実際に絵本を読んでいただくのがいいと思うのですが、いかにも昔話らしいアイデアは面白く、また著者自身の手による大変かわいらしい絵も見どころになります。

表題作のほかに6編が収録されています。1冊を通して、命に対する著者の包摂的な眼差しに癒されつつ、縦横無尽の想像力をたっぷり楽しむことができました。

(増山)



発行:ポーターインク(定価400円+税)

## 支援センターひらら便り

日本国内の新型コロナウイルス(新型肺炎)の感染拡大に歯止めがかからず、感染者ゼロの宮古島でも、相次ぐクルーズ船の入港キャンセル、好調だった観光入域客の減少等で観光関連消費が大きく落ち込み、また行政や民間もあわせ、一定の人が集まる行事やイベント等で中止が相次ぐなど、新型コロナ騒動の影響がじわじわと広がる。宮古の一大イベント・トライアスロン宮古島大会(4月)、ミヤコロックフェスティバル(6月)も中止が決まった。

今は、宮古島が感染者ゼロのままで新型コロナ騒動の一日も早い終息を願いつつ、ふれあいプラザ宮古(地域活動支援センターひらら)の利用者の活動見守りにあたる日々。幸い、常時の利用者に熱発や体調崩しは見られずセンター内はいつもの、ゆるやかな時間が過ぎていく。

利用者のいつもの光景が、新型コロナ騒動のせいかな普段より輝いて見える。健康に勝るものはなし。



この日のふれあいプラザの活動は、毎週月曜日午後に行われる「ストレッチ体操」。TV画面から流れるサザエさんの歌や、メタボ体操音頭のリズムに合わせて、軽快に手足や腰の運動。普段、体を動かす機会の少ない利用者にとって、2、3曲続けて体操に取り組むと、額から汗が噴き出すほど。「ストレッチは体にいい」「これで(体重が)1キロは減ったかな」など、体操

の後は談笑も弾む。

3月26日の浜下りの日(宮古ではサニツ)には、潮干狩りや浜遊びを楽しみに、伊良部大橋を渡って佐和田の浜に出かけます。

### ◎編集後記◎

機械やコンピュータについて実はおおよそチンプンカンプンな私ですが(本当に)、最近デジタルテクノロジーに関する本を読む機会が増えました。技術革新とは常に人の生き方や幸福のありようを深掘りすること抜きには成り立ちません。精神保健福祉の語り口とも、非常に親和性の高い分野と感じています。(増山)

編集：公益社団法人沖縄県精神保健福祉会連合会

会長 山田 圭吾

〒901-1104 島尻郡南風原町字宮平 206-1

てるしのワークセンター内

電話 098-889-4011 FAX098-888-5655

E-mail [terushino@castle.ocn.ne.jp](mailto:terushino@castle.ocn.ne.jp)

発行：九州障害者定期刊行物協会

〒812-0054 福岡県福岡市東区馬出 2-2-18

電話 092-753-9722 FAX 092-753-9723

定価：10円(会費に含まれる)